

湿地の喪失

■失われる湿地

Fig.1は昨年9月に撮影した画像で、日和山の北に存在した湿地である。常に水があり、泥地を好むヤマトオサガニやチゴガニが生息していた。Fig.2は今回の調査における同所で、完全に乾燥している。Fig.3はFig.2付近を遊歩道の上から撮影したものである。AがFig.2の場所で、遊歩道を挟んでBには池が存在していた。しかし、写真のように現在のBにはごくわずかの水しか存在していない。

蒲生付近は堤防工事が進み、これまであった池が失われている。以前の蒲生にはいくつもの養魚池が存在した。栗原康著「干潟は生きている」によると、春から秋にかけては1日に約7000トンの淡水が養魚池から干潟に供給されており、人工的な環境であるが干潟に安定して水を供給するというはたらきをしていた。長期にわたって存在した水源が失われることが干潟に与える影響に、しっかりと目を向けていきたい。



(Fig.1 2016.9.11の湿地)



(Fig.2 2017.6.17 Fig.1の同所)



(Fig.3 Fig.2池の位置関係)

■稚魚の成長は順調

Fig.4は今回採集したイシガレイの稚魚、Table.1は全長と採集数を示している。

Fig.4の稚魚の大きさは6.0cm

4.5cm, 3.0cmである。今回の調査における全長の平均は約4.5cmであった。先月の平均は約3.6cmであり、順調に成長していると考えてよいであろう。

稚魚の全長	3.0cm	3.5cm	4.0cm	4.5cm	5.0cm	5.5cm	6.0cm
採集数(河口)	2	1	7	6	3	2	3

(Table.1 稚魚の全長と数 6月)



(Fig.4 今回採集した稚魚)



(Fig.5 流れ藻)



■流れ藻の生物

干潟内にはFig.5のような流れ藻が多く見られた。これには多くの生物が生息している。Fig.6は同所で採集したケフサイソガニであるが、このような成長過程にある生物にとって絶好の生息場所であろう。

(Fig.6 ケフサイソガニ)

(佐藤 賢治)